



かわった私



sanuki soba

彼に、ふられた。

彼と言っても4ヶ月ちょっとしか付き合っていないし、でも、カップルっぽくそれなりに色々なことをしたし、たった4ヶ月だけだけど私は一応お子様の恋愛じゃない恋愛をした。そんな彼に、ふられた。

大学1年生の秋学期に、春学期から同じクラスだった彼に思い切って告白したのが始まり。なんで好きになったのかとかはもう覚えていない。遠い昔の話みたいだ。でも、付き合っている間は楽しかったことだけは忘れない。どうしよう、私はまだ彼のことが好きだ。

別れてから1ヶ月くらい経ってから、私は彼が他の女の子と楽しそうに話しているのを見かけた。大学近くのファストフードで楽しそうに科目を選んでいて、よく笑う、明るい女の子だった。いつも明るい彼はきっと、明るい子が好きだったんだろう。あまり明るくない私は彼にとってあまり楽しい相手ではなかったのかもしれない。

私のこと好きじゃないなら付き合ってくれなくてよかったのに。中途半端に優しくされたから私はめんどくさい気持ちを抱えることになってしまった。彼は私をからかっていたのだろうか。タイプでもない女の子と付き合うってどういうことなんだろうか。

結局私は、彼の顔を見るのが嫌で、彼が楽しそうな顔をしているのを見るのが嫌で、誰もとらないような講義を積極的に選び彼を避けるようにした。彼だけじゃなく、彼の周りの人も、彼と私が付き合っていたことを知っている人も私は避けた。どこか別の世界の人になりたかった。ふられた私がふった男と同じ空間にいるのはどこか、惨めだった。

2年生の春と夏と、秋が過ぎる頃、私は誰も私を知ることのない空間で私ですらしらなかった私になっていった。ただ、自然に笑える、明るい子になりたいという一心で私はあっけなく、かわっていった。

クラスコンパ、飲み会、バイト、いろんなところに顔を出した。友達もたくさんできた。携帯のアドレス帳はどんどん増えていった。髪形も化粧も変えた。バイトで稼いだお金で新しい服を買った。今までに着たことのないような服がクローゼットにはどんどん増えていった。

私は、かわった。

3年生になって、私は彼と同じ講義をとってしまった。最初彼は私のことに気付いてなかった。それくらい私はかわったのだ。

あるとき友達が私の名前を呼んだとき、彼は私が私だと気付いたようだった。

彼は、ちょっとお茶でもどうかな、と私を誘った。

大学近くのファストフード、別れて1ヶ月後に私が彼を見かけたお店で、私は彼と話をしていた。彼は私をふったことを忘れたかのように楽しそうに話しかけてきた。私も笑顔で彼と会話をしていた。

視線を感じ、ふと辺りを見回すと、地味な雰囲気の子が私と彼のことを見つめていた。泣きそうな顔をしていた。

「あなたも変わればいいのよ」

「所詮こんなやつなのよ」

私はどちらの言葉を彼女に投げ掛けたかったのか、それは今でもわからない。